

たきかわECOフットパスへのアクセス



新版 ECO フットパス・マップ

たきかわを散歩する



たきかわ環境フォーラム

ふるさと 再発見の 愉しみ

古来、人は生活のために野山を歩き、そこに自然に道ができました。しかし、いつしか道は、ただ早く快適に移動できさえすればいい、と思われがちになりました。

フットパスとは、フット（踏み歩く）とパス（道）を組み合わせた言葉。ゆっくり歩くことによるのみ発見できる地域の自然とのふれあいを楽しみ、地域の歴史・文化・産業に触れ、そして地域の人々と交流しながら歩くこと、これがフットパスです。本場イギリスでは、今やすっかり文化として定着しているそうです。

たきかわ環境フォーラムは、滝川という地域にこだわったエコ(地域の)・フットパスを実践してきました。単なるウォーキングではない「ふるさと再発見の愉しみ」を、このマップから皆さんも体験してみてください。

たきかわ環境フォーラム
高橋一美



ちんぽのまちむ	「通り名」物語	6
	空知川の生き物たち	16
	滝川のファーマーたち	23
	パニウクルのエコライフ	25
	憧憬の江部乙	30
	第一出島川の生態系	32
	江部乙とりんごの物語	39
	滝川のひつじとジンギスカン料理	45
	フットパスは、気まま旅	46

市街地エリア

ソーラップチ(滝のある川の中)

レンガ造り倉庫群

暮らしのなかに、美がある。
文化がある。歴史がある。



ふるき、よき滝川

幼い頃、「まち」に買い物に行くことが何よりの楽しみでした。必ず立ち寄った「名店ビル」。母親の手をぐいぐいとひっぱり、階上のペットショップで金魚や小鳥たちにあいさつしたあと、威勢のいい呼び込みのおじさんの声と買い物客で賑わう1階で、樽の中で泳ぐどじょうを飽きずにながめていました。

帰りは必ず「きくや」のたい焼きを、家族の人数分。ほかほかの紙袋を手にした夕暮れ時のバス停には、それぞれいろんな「ほかほか」を抱えた人が、たくさん並んでいました。

滝川生まれ、滝川育ちの私にとつ

て、これが「まち」の原風景です。時代とともに変わってしまったまちの姿。でも、ここかしこに「まち」のこれまで

を語る“証人”が佇んでいます。歩いてこそ知ることのできる「ふるき、よき滝川」。忘れられないあなたの原風景が見つかるかもしれません。

(吉住晴美)



A 滝川駅

1898年(明治31年)7月に鉄道上川線(現在の函館本線)の開通とともに、空知太駅が滝川に移転し「滝川駅」と改称されました。現在の駅舎は1962年に建てられたものです。

B 太郎吉蔵



滝川市は明治時代から交通の要衝として栄えてきました。函館本線が通り、根室本線の基点でもある滝川駅は、その玄関口としてまちの発展を見守ってきました。

1926(昭和元)年、五十嵐太郎吉が「五十嵐酒造店」の醸造米の貯蔵倉庫として建設した、美瑛軟石と推定される木骨石造りの建物。現在は文化施設としてとさまざまな芸術文化活動が展開されています。滝川市指定文化財。お問い合わせはNPO法人アートチャレンジ滝川へ。

☎ 0125-22-7337

「通り名」物語

市街地の通りには、むかしの滝川の姿をうかがい知る素敵な「通り名」がついています。1897(明治30)年、通りに名前をつけてその位置を示すようになりました。楓の木があった「楓通り」、当時菜の花が盛りであったことを示す「菜花通り」。材木を積み重ねてあったことから付けられた「材木通り」。そして倉庫に面した「蔵前通り」。100年を越え、滝川の歴史を支えてきた道。親しみを込めて名前と呼んでみませんか。(吉住晴美)



C 北洋銀行滝川支店

長く市民に親しまれてきた歴史的建造物です。1918年(大正7年)、この地に開業した北海道拓殖銀行滝川支店が、14年後に市内で初めての鉄筋コンクリートビルとしてこの洋風建築の店舗を完成させました。コリント式柱頭を持つ「ジャイアントオーダー」(複数階を貫く高い柱)が並ぶ威風堂々とした建物の評価は高く、日本建築学会の「日本名建築物」指定(79年)を受けています。96年の改築工事では、市民の保存要望を受けて外観を保存し、内部だけがリニューアルされました。拓銀から北洋銀行に変わった今も、まちの記録を刻んでいます。



コリント装飾=ローマ時代の神殿建築で発達した柱立のデザイン。アカンサス(ハアザミ)の葉をかたどった飾りが特徴です。

D 滝川神社

1906年(明治39年)創立。お祭や初詣のほか、人生の節目に参拝する人々の神妙な顔は今も昔も変わりません。境内には多くの碑があり、歴史探訪もおすすめです。

春祭 / 6月9日～6月11日
秋祭 / 8月22日～8月24日



E みなもと 水源公園

滝川神社横にあります。池にかかる遊歩道を渡りながら水辺の植物を観察することができます。特に、芽吹きの中と紅葉の美しい秋が散策のオススメ。駐車場も完備されています。



F 滝川第一小学校

1893年(明治26年)、「空知太尋常小学校」として開校。1909年にこの地に移転され「第一尋常高等小学校」と名前が変わりました。エッセー集「チョッチャン」で知られる故黒柳

朝さんも学び、学校前の「一の坂」を遊び場に使っていたそうです。校舎前庭には高さの規準を記す「水準点」があります。



G 屯田兵将校官舎跡

屯田兵団が「開拓」した滝川市には、その歴史を示す多くの碑があります。校舎前庭北側にある「屯田兵将校官舎跡」碑もそのひとつ。兵村の統治者でもあった屯田兵幹部が入居した将校官舎は、樺戸集治監(現在の月形刑務所)の囚人たちの手で建てられました。

H 一の坂西公園

河岸段丘の斜面にある見晴しの良いこの公園は、市民の憩いの場。シンボルは滝川市出身の彫刻家、五十嵐威暢さん作の「ニョキニョキ」。隣にある「一の坂保育所」の子どもたちが名前を付けました。遊具も充実。迫力満点の滑り台体験はいかが? トイレ、駐車場あり。



I レンガ造り倉庫群

堂々とした風格を競い合う赤レンガ倉庫群は、農産物の貯蔵庫として大正期に建てられたもの。今はレストランやフードショップなどとして活用されています。



J おた福餅本店

フットパスを歩いて疲れたら、甘味処で癒してみても。昭和元年創業の「おた福餅」では昔から変わらぬ甘さを提供。市内外に根強いファンがいます。お餅、お団子などのメニューがあります。8時~16時、日曜定休。滝川市本町2-1-32 ☎ 0125-23-3393



東町エリア

変化する風景の中の、
たゆまない日常を旅します。



市民会館

時間を遡ってみませんか

市内で最も様変わりが激しいエリア。1995年に開通した国道12号バイパスの沿道には有名チェーン店の看板が急増しました。でもそのそばには、滝川の歴史を語るあれこれが静かに息づいているのです。

バイパスに並列する東2号通は、北海道初の「輪中堤防」のなごり。丘の上には歴史的建造物が大切に保存されています。あるいは、数百万年の太古に栄えた絶滅動物の化石発見地……。

「今の滝川」を離れ、過ぎた時間をゆっくりと遡ってみませんか。そう、空知川の流れるように。(吉住晴美)



十勝道路





A 東公園

ランドマークの「交通安全祈願聖観音菩薩像」は、1本の原石から作られた仏像としては日本一の大きさ。「現代の名工」の一人で、大仏師の称号を持つ長岡熙山氏(滝川市出身)が1988年に彫り上げました。像に見送られ、木製の階段を降りれば東公園。子どもに人気の高い恐竜たちが出迎えてくれます。



C 華月館(旧「三浦屋」)

B 「アイヌの森」のチセ

「チセ」とはアイヌ語で家のことを言います。北海道アイヌ協会旭川支部との協働で、國學院大學北海道短期大学のグラウンド東側に設けられた「アイヌの森」のチセの建設

には、材料の収集から組み立て、笹ふきなどの作業まで、同短大の教職員や学生たち、滝川市建築士会のメンバーたちなど、大勢の市民が参加しました。



写真提供・滝川市

D 市民会館

華月館は、三浦屋(現:miura、ホテル三浦華園)二代目・三浦庄作が1914年(大正3年)、御料局滝川出張所の建物の払い下げを受け、貴賓室として要人宿泊に利用されていた建物で、市指定文化財に指定されています。和洋折衷の様式で、明治から大正期の民間高級住宅の趣を伝えています。隣接する市民会館では、滝川出身の故・黒柳朝さんが集めた西洋アンティークコレクションが公開されています。



E タキカワカイギュウ 化石発掘地

1980年(昭和55年)8月、赤平市の久野春治さんが、趣味の石探しのため空知川を歩いていました。久野さんの影だけが流れる渇水した空知川の河床。そこに、いままで見たことのない「骨」のようなものを発見したのです。市民も大勢参加した発掘・研究の結果、化石の主は、今から500万年前に生息していた海牛(現生のジュゴンと同じ仲間)の一種であることがわかりました。「タキカワカイギュウ」と名づけられたこの化石は、その後、新種の家牛として論文発表されるとともに、北海道天然記念物に指定されました。北海道産の化石は、それまで地元に残ることはほとんどなく、遠方の研究機関に保存されることが常でした。その中で、タキカワカイギュウは地元主義を貫き、調査研究、複製、保存、普及とすべて地元で行なわれ、以降の北海道産化石の取り扱いに大きな影響を与えました。体長7m、海藻を好んで食べていたタキカワカイギュウは、その姿が復元され、美術自然史館で太古の滝川のような静かに語りかけています。



写真提供・滝川市 (p15上の写真も)



滝川市美術自然史館
滝川市新町2-5-30 ☎0125-23-0502
開館時間/10時~17時
休館日/月曜、国民の祝日の翌日など
入館料/一般600円、高校生360円、中学生240円、小学生120円、幼児無料

F 銀杏並木道

街路樹が一番美しいところといえば、東2号通りの銀杏並木。秋、黄金に色づいたこんもりとした樹幹が街に彩りを添えます。特に、坂の上から見下ろすのがおすすめ。夕日とのコラボレーションがまた格別です。秋の楽しみが増えました。



空知川の生き物たち

平田剛士

大雪山系を発して南下してきた石狩川と、夕張山系から東進してきた空知川とが、ぶつかって合流するちょうどその場所に、滝川は位置しています。

この名は「滝のある川のところ」を意味するソーラップチというアイヌ語地名に由来しますが、同じ語源を持つ空知川の性格をよく表しています。中・上流部には急峻な流れが連続し、独自の生態系を育んできました。

たとえば、開拓期以前までさかのぼっても、空知川にはサケの遡上記録がありません。河口から150kmほども上流にある旭川市の石狩川に、かつてサケの一大産卵場があり、川

のほとりに大きなコタン(集落)が形成されていたのとは対照的です。

ご多分に漏れず、ここ空知川でも昭和期以降、改修工事やダム建設などによって、生き物たちのすみかが失われてきました。滝川・赤平・砂川各市の境界に近い鮫淵というポイントでは、昭和初期まで巨大なチョウザメ(チョウザメ科)が無数に集まってきて産卵していましたが、絶滅しました。かつて空知川の象徴だったイトウ(サケ科)は、今では最上流部の金山ダム湖(南富良野町)にわずかに生き残っているだけです。

そんななか、うれしい再発見も。2010年夏、たきかわ環境フォーラムが、東滝川地区の空知川で地元

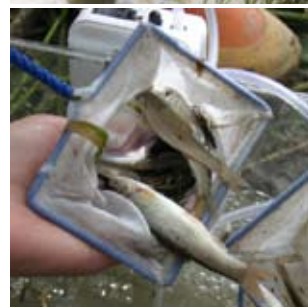


銀毛化したカワヤツメ

の東栄小学校と実施した魚類相調査では、ウグイ・フクドジョウ・ルリヨシノボリ・ヤマベ(サクラマス)・ウキゴリといった在来魚たちが次々に捕れました。

太古のままの姿をして、「生きた化石」と呼ばれるカワヤツメ(ヤツメウナギ科)も見つかりました。環境破壊のせいでほぼ絶滅しただろうと考えられていましたが、アンモシーテスと呼ばれる幼生や、海に向かうために銀毛化した個体が確認され、カワヤツメがこの付近で自然繁殖に成功していることが分かったのです。

生き物たちの様子をいつも観察し続けることが、空知川の生物多様性を守るにつながります。



旧波止場エリア

120年前、
ここは汽船の港でした。

航空公園



500m
1:42,550



ルート距離
約5.5km(往復10km)
高低差 約2m

交通の要衝として

石狩川沿いの滝川西地区には、屯田兵の往来のため、1890年(明治23)年に江別や月形からの汽船が運航され、波止場が置かれました。船での運送はすぐに鉄道にとって代わりましたが、同じ場所に今は河川敷を利用した航空公園があり、グライダーや軽飛行機が飛び立っています。

太平洋戦争後に行なわれた河川の切り替え(ショートカット)工事により、河跡湖ラウネ川が誕生。その周辺は、玉ねぎ栽培に適した肥沃な農地になっています。

(高橋一美)



A 西公園

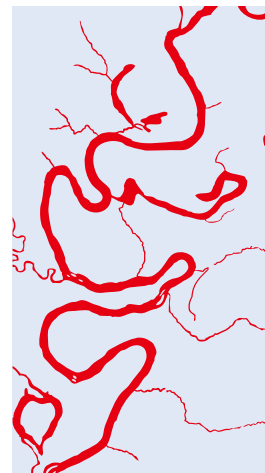
石狩川堤防側は緩やかな傾斜の桜づつみになっていて、公園内の桜と合わせて、春には鮮やかなサクラ色で目を楽しませてくれます。温水プールやパークゴルフ場を備え、グライダーが飛行する春から秋にかけては、その離着陸の様子を間近に楽しめます。



B 石狩川の堤防と築堤

石狩川の治水事業がスタートしたのは1910年(明治43年)。蛇行した部分をショートカットする捷水路方式が採用されました。当時は自然の川の流れをそのままにし、洪水時のみ、あふれた水を流す方法も検討されましたが、農地開発を目的としていたため、この方式は採用されませんでした。1918年～69年までに29か所の捷水路が作られ、石狩川の長さは100kmも短くなりました。滝

川でも6か所が工事され、副流のラウネ川などが河跡湖となって残っています。滝川はひんぱんに洪水に見舞われ、24年に滝川駅の南側から市街地を囲む堤防が作られました。35年には国の事業に先駆けて被災地域の人々が立ち上がり、江部乙村独自の大事業として1861mの堤防が完成。連続させる形で国が工事を進め、安全性が高まりました。



明治期の石狩川筋
(空知原野集落分布図)



昭和中期の石狩川筋
(滝川市史地質図)



現在の石狩川筋
(国土地理院地勢図)

渡し場の昔語り

吉住晴美

石狩川と空知川に挟まれた滝川にとって、人々の生活と川は切り離せないものでした。特に、橋が架かるまで、川は重要な「道」でもありました。

滝川の渡船は、1886年(明治19年)、現在の空知大橋のたもとに三浦米蔵が設置した「空知川の渡し」が最初でした。初めは丸木舟だったのが、やがて板船へと変わり、人や荷馬車、農産物を載せ、一時は定期

バスまでが船に載せられて川の兩岸を行き来していました。

渡船の航路は、冬になって川が凍りつくと、雪や氷を利用した「氷橋」へと姿を変え、人々の生活道路になりました。

橋が完成するとともに、渡船は次々と消えていきました。もしかすると時を同じくして、人々の心もまた、川から次第に離れてしまったのかもしれない。



滝川のファーマーたち

森井智江



後継者不足といわれて久しかった滝川の農業に、新しい風が吹いています。入植3世、4世の人たちが、農業に魅力を感じ、新しい形の営農に取り組んでいるのです。

「とんぼ米」というブランド米を生産している寺崎啓一さんはその一人です。新たにグループを作って低農薬でのコメ栽培を実現し、健康志向の多くの消費者の心をつかみました。

同じグループの中には、ミニトマ

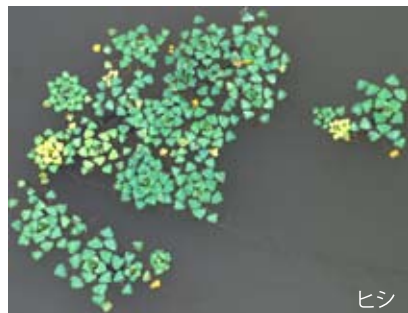
トやアスパラガスなどの栽培に挑戦している人もいます。これまで稲作一色だった滝川も、今ではいろいろな作物でにぎわいを見せているのです。トマトにナス、トウモロコシ、ナガイモ、タマネギ。涼やかな気候を生かして、ハウスの中では1年中、色とりどりの花々が咲き乱れています。

農業はやっぱり「3K」かも知れないけれど、それを凌駕するステキな何かがあるに違いありません。

C ラウネ川 「ふるさとの架け橋」



海洋センターでは誰でも簡単にカヌー体験ができます。ここは池の前水上公園と呼ばれ、歩行者のみが渡れる長さ144mの吊り橋「ふるさとの架け橋」が架かっており、川面のカヌーや釣り人を眺めながら空中散歩の気分が味わえます。

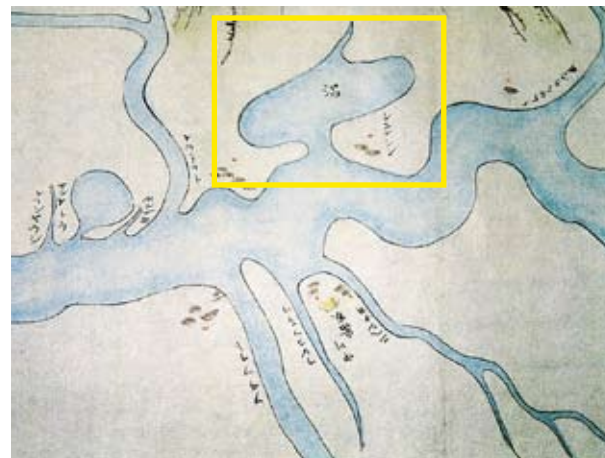


パニウクルのエコライフ

河野敏昭

江戸期の滝川あたりの地図をみることにはまことに楽しい。どうも、この周辺の歴史が明治からはじまっていると思いついでいる方々が多いが、幕末期には多くの和人が調査にやってくる地図などで滝川周辺の記録も残している。有名なのは松浦武四郎、彼のイシカリアイヌ・レポートは迫力がある。パニウクルとは「中川人」という意味。石狩川中流域にすむアイヌはパニウクルと呼ばれたという。(これに対して、旭川地域はペニウクル=上川人たちの生活圏だった。)

個人的に、この周辺の地図で注目したい地点は新十津川町にあるシストーという沼である。幕末に描かれた「西蝦夷地石狩場所絵図」のなかで、中川番屋やアイヌコタンなどととも大きく描かれている。開拓使の高畑利宜(1841~1922年)も、上川調査の復命書にシストーを大きく描いている。推測だがソラチアイヌにとって貴重なスポットだったのであろう。昭和40年代まで、旭川のアイヌ文化伝承者、杉村キナラブックさんたちは、ペカンペ(菱の実)やカバト(コウホネ、チタラベ



(ござ)の材料のガマを採りにシストーをたびたび訪れている。パニウクルにとってシストーは生活に欠かすことのできない食料や素材を提供してくれる大切な場所だったことだろう。

「西蝦夷地石狩場所絵図」(幕末期)から

江部乙田園エリア



石狩川穀倉地帯に、
まっすぐな小道が伸びています。



変貌する水郷

なんだか平坦な水田がひろがる江部乙の西側地区、かつては三日月湖が数多くあり、近隣からウグイ、フナなどを求める釣り人で賑わいました。

江部乙の米作りのはじめは1894年(明治27年)、屯田兵の石田安一郎が「赤毛早稲」を熊穴川のそばで

自然流下水を利用して試作を始めたと伝えられています。今は水田が広がる穀倉地帯ですが、開拓時代は農地に点在する泥炭に苦しみました。アジア太平洋戦争後の客土(土壌改良)や土地基盤整備事業などにより、飛躍的に米の増産が進んだのです。(河野敏昭)

A 江部乙の商店街

江部乙屯田兵の入村は1894年(明治27年)。当初は、番外地(市街地)はとくに計画されておらず、商店街は後に形成されました。江部乙駅前通りは「^{ほんが}榛谷通り」と呼ばれています。かつてこの通りで病院を経営してい

た榛谷清水氏が町に土地を提供、そこに駅前の通りが形成されたため、町の人々が感謝の意味を込めて「榛谷通り」と呼び習わしたのです。



B えべおつ温泉

江部乙駅のすぐ近くにある温泉。旅行雑誌「北海道いい旅研究室第8号」(2005年)に、「道内で最も駅に近い温泉宿」と紹介されました。大正時代から冷鉱泉を沸かしていましたが、昭和57年、ボーリングをしたところ43℃の強塩泉を掘り当てました。 ☎0125-75-2555
えべおつ温泉:宿泊施設 効能:関節痛・冷え性

C 江部乙駅

1898年(明治31年)に開駅、当時は上川鉄道といました。当初の駅舎は西11丁目に作られましたが、泥炭地だったため、現在地に移転しました。江部乙駅は米やリンゴの搬送で賑わい、江部乙りんごを旭川や札幌で売り歩く「担ぎ屋」の女性たちも多数乗降していました。最盛期には駅員20人が勤務、昭和30年の1日平均乗客数は1250人という盛況ぶりでしたが、徐々に低迷し、今は隣のJR深川駅が管理する無人駅です。



憧憬の江部乙

昔は、国道12号を境にして、東の丘陵地帯にりんご並木、西の泥炭地に水田が広がって、岩橋英遠画伯の『道産子追憶之巻』そのものの四季や日常が見られました。秋、西の水田地帯からは稲わらをいっぱい積んだ歩道車が馬に引かれて国道を横切って東へ向かい、東からはりんごの小枝を満載したトレーラーが国道を反対に横切って西へ向かっていきました。厳しい冬を間近に、稲わらはりんごの木の根元に敷かれ、りんごの小枝は石炭ストーブの焚きつけとして重宝されたのです。

歩道車を引く馬も、トレーラーを引く耕

森井智江

耘機も、今は姿がありません。ハサ掛け（刈り取った稲束をハサと呼ぶ横木に吊して天日で乾燥させること）をしなくなったので、稲わらもなくなってしまいました。石炭ストーブなどは、すっかり骨董品です。

でも——春のしろかき、まっすぐに植えられた苗の条、すくすく育つ苗の緑。可憐な稲の花。黄金色の稲穂、夕焼け空を飛んでいくたくさんのトンボたち……。

機械化が進んでも、変わらない農作業の数々。田園を歩くと、ご飯がおいしい秘密が、分かるような気がします。

D うりゅう沼川～第一出島川



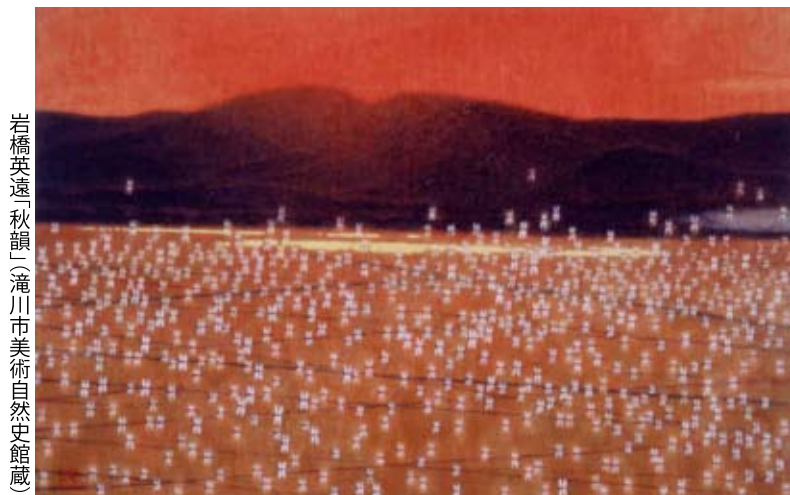
私が子どもだった時分に、祖母から、聞かされた話です。

西11丁目を西の方へ下がると、石狩川に突き当たります。まだ子どもだった祖母が、漬け物石を探しに、その河原まで出かけた時の話です。川の向こう岸には、アイヌの人たちが住んでいました。河原に、口の周りに入れ墨をした女の人たちがいたので、あいさつして断ってから漬け物石を持ち帰ろうとしたところ、彼女たちが、川面に柳の枝が垂れて

いて水面がぐるぐると渦を巻いている場所を指さし、「今度大雨が降ると、ここは大きな川になる」と教えてくれました。

何日か経って、また漬け物石を探しに同じ場所へ行くと、本当にそこが大きな川の水底になっていて、漬け物石は拾えなかったそうです。

「アイヌの人たちは何でも知っているんだよ」と、祖母は幼い私に話してくれました。(森井智江)



岩橋英遠「秋韻」(滝川市美術自然史館蔵)

第一出島川(三日月湖)の生態系 越後 弘

明治期まで、石狩川は原始の姿をとどめて、激しく蛇行・分流しながら流れていました。ここでは、分流したうち東側の川が凸状に急カーブを描き、2本の川に挟まれた中州がちょうど海岸沿いの出島のように見えたので、この名が付いたのでしょう。当時の石狩川は氾濫を繰り返し、入植者たちは水害に悩まされました。治水工事が進み、第一出島川は本流から切り離され、いわゆる三日月湖として取り残されたのです。

広さはおよそ8haで、まわりの田んぼの排水が3カ所から入り込み、水は西端部から石狩川に流れ出ています。水底には川砂利が眠っていて、かつて長期にわたって掘削され続けたため、最深部では、水深が15m以上あります。

河川保護のために砂利採取が禁

止されると、地域の人たちの美化運動によって周辺が整備され、次第に野鳥観察の人や魚釣りの人たちが訪れるようになりました。

たきかわ環境フォーラムの2010年夏の調査では、4科8種の魚類を確認。うち4種が外来種でした。

水面にはヒシが大きな群落を形成しています。また絶滅危惧種エゾノミズタデをはじめ、多様な植生が生育していることも分かりました。

流れがほとんどないので、春には、北へ帰るたくさんの水鳥たちが羽根を休めていきます。オナガガモ・キンクロハジロ・コガモ・ヒドリガモなど、カモの仲間たちの鳴き声で水面は大いに賑わいます。日本野鳥の会滝川支部の観察では、草原性の野鳥や猛禽類も多く飛来し、春から秋まで気軽な散策を楽しめます。



第一出島川近辺で確認された植物 2010年8月、たきかわ環境フォーラム調べ

イネ科	イヌビエ ヨシ クサヨシ	キキョウ科	ミゾカクシ	タデ科	ミソソバ オオイヌタデ
イラクサ科	エゾイラクサ	シソ科	イヌゴマ	ツユクサ科	ツユクサ
ウリ科	ゴキツル アマチャヅル	スイレン科	ヒツジグサの一種 コウホネ ハスの一種	ヒシ科	ヒシ
オモダカ科	オモダカ	セリ科	ドクゼリ	ヒルガオ科	ヒルガオ
ガマ科	ガマ	タデ科	イシミカワ エゾノミズタデ イヌタデ	ヒルムシロ科	センニンモ
カヤツリグサ科	フトイ			マツモ科	マツモ
				ムラサキ科	ヒレハリソウ

第一出島川で確認された魚類

2010年7月、たきかわ環境フォーラム調べ

コイ科	ウグイ ゲンゴロウブナ タイリクバラタナゴ モツゴ	外来種 外来種 外来種
ドジョウ科	ドジョウ	外来種
トゲウオ科	トミヨ	
ハゼ科	ジュズカケハゼ トウヨシノボリ	



江部乙丘陵エリア

ユーベオツ(ちょうぎめのいる川)

満開の菜の花畑をひとりじめ。
ふりかえれば大パノラマが広がります。



江部乙には、二つの駅がある

なだらかな丘が連なる江部乙地区の「開拓」は1894年(明治27年)、屯田兵400戸の入植によって始まります。江部乙村として滝川村から分離したのは1909年。1952年に江部乙町となり、1971年には滝川市と再び合併しました。現在も純農地域で、水稲のほか、ナタネやリンゴの生産が盛んです。

江部乙には駅が2つあります。

JR函館本線の江部乙駅は、今でこそ無人駅ですが、戦後復興期には1日に1000人以上が利用する、農産物の一大発送基地でした。

一方、国道12号沿いの「道の駅たきかわ」は、地元産品の直売所や

レストランが併設され、江部乙観光の拠点として賑わっています。

(高橋一美)



JR江部乙駅



道の駅たきかわ

B 野鳥館

日本野鳥の会滝川支部会員の大崎順助さんがコレクションを公開している私設ミュージアム。空知地方の野鳥たち約100種を撮影した写真パネルやバードカービング作品、近くで採集した古巣などが展示されています。窓の外の餌台には、アトリやムクドリたちの姿も。訪問前に連絡を。☎ 090-9085-6397(大崎さん)



「交流の森」のアオサギたち(撮影・大崎順助さん)

C 江部乙公園

ランチタイムにぴったりの自然公園です。春にはミズバショウやサクラが咲き、秋にはリンゴが実をつけます。静かに待っていると野鳥たちが美しいさえずりで歓迎してくれるはず。ベンチ、トイレ、駐車場あり。



D 交流の森

江部乙公園のお向いにある「江部乙交流の森」には、ウッドチップを敷き詰めた遊歩道が伸びていて、森林浴にぴったり。大型の野鳥アオサギの滝川市内唯一の集団営巣地です。駐車場あり。



E 鋤塚と芽生村塾

時代は昭和初期。横山春一(1911年～89年)が、仲間と共に学ぶ農民塾として1932年に現在の江部乙東13丁目に開設したのが、芽生村塾です。春一が師事した賀川豊彦(キリスト教社会運動家、1888年～1960年)の勧めで、後に北海道農民福音学校としての活動も開始。農閑期の冬みの開校でしたが、北大教授らが教壇に立ち、理想の農村づくりに燃える若者たちを教えました。

しかし社会情勢は悪化の一途を

たどり、1940年には賀川が反戦思想嫌疑で憲兵隊に連行され、春一も江部乙を離れてしまいます。芽生村塾と北海道農民福音学校の活動も終りを告げました。

芽生村塾の跡地には戦後、江部乙農業高校の新校舎が建設されました。その校舎も54年に移転されることになり、記念にこの「鋤塚碑」が建立されました。塚には春一のクワと、屯田兵が使用した官支給のクワが1丁づつ埋められています。

(河野敏昭)

いわはしえいえん いちきますみ
F 日本画家 岩橋英遠と 洋画家 一木万寿三

同じ1903年(明治36年)生まれの岩橋英遠(99年没)と一木万寿三(81年没)は、家が隣同士でともにリンゴ園を営んでいました。幼いころから親交があり、互いに影響を与え合いながら画家を志しました。2人は若くして上京しましたが、創作のよりどころはいつも故郷にありました。英遠は大自然を壮大なスケールで描き、万寿三は農場で働く人々の姿を明るく伸びやかな筆致で描

いて、芸術家としての成功を取めたのです。(2人の作品は滝川市美術自然史館で常設展示中です。→P14)



とうきよ
G 大野耕太郎ギャラリー「陶居」

「江部乙の風景に惚れ込んで移住してきたんです」と話す陶芸家の大野耕太郎さんが、見晴らしのいいアトリエの一角に私設ギャラリーを設けています。大野さんは、岐阜県多治見や、スペイン・マドリッドで作陶を学びました。伝統技を発展させた独特の技法で生み出す作品は内外で高い評価を得ています。金曜～日曜はカフェ・オルノを営業。

☎ 0125-75-6568(大野さん)



江部乙とりんごの物語

河野敏昭

1894年にこの地に入植した屯田兵たちがりんごの苗木を共同で植付けしたのが「江部乙りんご」の始まりだったそうです。当時から品質は折り紙付きで、1905年の北海道農産物品評会では見事1等を射止めています。しかし大寒波が襲った13年の冬には多くが枯死し、そのうえ「腐乱病」が蔓延して一時は耕作面積が激減しました。

それでも人々はめげずにりんご作りに励み、おかげで戦後期には「りんご成金」が生まれたことも。品種改良も進んでりんごは江部乙随一の名物になりました。しかし今度は

農産物貿易自由化という荒波が襲い、かつて600ヘクタールを超えたりんごの栽培面積も現在では20分の1程度に縮小してしまいました。

とはいえ、緩やかな丘の斜面に連なるりんご畑の風景は、江部乙のシンボル。そのただ中を、エコ・フットパスは続きます。



H 屯田兵屋

1894年、江部乙屯田兵400戸が入植し、家族ぐるみ「北の警備」と「開拓」に従事しました。当時をしのばせる「兵屋」が保存されています。



東滝川エリア

ホロ・クラ(大きな・仕掛弓かける所)

河岸段丘に広がる緑の絨毯。
青空の下、田園の小道が続きます。

ルート距離 約5km

高低差 約20m



東滝川いまむかし

空知川は、十勝アイヌと空知アイヌの交流の道でした。空知アイヌの古老・空知保氏(故人)からの聞き書きによると、十勝アイヌは時にトパットミ(群盗)となって滝川アイヌを襲った、とあります。かつて市内2丁目を流れていたテパウンナイは、アイヌ語で「ふんどし川」の意。盗賊と争った際、血にそまったふんどしを洗ったところから名づけられたといえます。

東滝川はかつて下幌倉と呼ばれていましたが、これはアイヌ語の「ホロクラ」にちなんだもの。「ホロ」は「大きい」、「ク」は「弓」のこと。近くにイオル(獵場)があったのでしょうか。

空知川沿いにはポン(小さい)クラという地名も残っていて、縄文時代の土器などが多数産出されています。

明治以降は屯田兵公有地とされましたが、1901年(明治34年)に屯田兵は解散。間もなく「六戸」が入植して下幌倉開拓が始まりました。小林和三郎が一带の260余町を買ひ、いわゆる小林農場をつくります。また農商務省月寒種牛牧場滝川用地、農商務省滝川種羊場が設置され、のちに道立畜産試験場として「羊のいる北海道らしい牧歌的風景」として多くの人々に親しまれました。

(河野敏昭)

A 東滝川駅

1913年(大正2年)、下富良野線の開通により幌倉駅として開業。滝川駅を起点とする根室本線(終着駅＝根室)全線が開通したのは、8年後の1921年。延長450kmに及ぶ長大な路線です。



B 東栄小学校

1907年(明治40年)、幌倉特別教授所として開校。滝川尋常高等小学校幌倉分教場の名を経て、52年に東栄小学校となりました。シンボルと言うべき校庭のメタセコイヤは、長野から苗木を持ち帰った坂田富男氏から63年の校舎落成記念に寄贈されたもの。次第に児童が減り、創立100年を超えた2012年、約4km離れた東小学校に統合されます。



「めんこい仔馬」歌碑

ボタンを押すと「濡れた仔馬のたてがみを／なでりゃ両手に朝の露」と、軽快な歌が鳴り響きます。作曲した仁木他喜雄は少年時代をこの地で過ごしました。森繁久弥から揮毫が



寄せられ、二葉あき子のリサイタルも行なわれました。

C 農場通り踏切～田園ゾーン



なんだか懐かしい石ころだらけの道。根室本線の踏み切りを越えて広々とした水田地帯を抜ける気持ちのいいルートです。春にはヒバリの鳴き声を楽しめます。道ばたの用水路

には、かつて夏になるとホテルが乱舞しましたが、最近はめっきり減ってしまったよう。幌倉神社でお参りしてから、花・野菜技術センターの広大な牧場風景を楽しめます。

D 幌倉神社

幌倉地区の「開拓守護神」として、小林農場内に1909年(明治42年)ごろ創立されました。かつて「金箱神社」と呼ばれたのは、小林家が長野県の金箱家とゆかりがあったことに由来します。現在は東滝川住民の安全と豊作を祈願、子供御神輿を行なうなど地域に密着した神社として親しまれています。



E 花・野菜技術センター

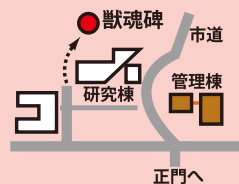


札幌ドーム24個が収まる広大な研究施設。レンガ造りの事務棟前に建つひつじ像は、ここが畜産試験場だった当時の名残です。白い研究棟の前庭ではガーデニングのプロたちが丹精込めた花壇を楽しめます。

研究棟前庭のトイレは平日のみ使用できます。ジュースの自動販売機あり。事前に連絡しておけば実験圃場の見学も可能です(平日のみ)。問い合わせは同センター総務係へ。
☎ 0125-28-2800(内線207)

畜産試験場の名残

研究棟裏の小さな広場に2つの石碑が建っています。「獣魂碑」と「鶏魂碑」。畜産試験場だった当時、ここではたくさんの家畜が飼育されていました。そんな家畜たちの魂を鎮める碑のまわりには今、野花が咲き誇っています。滝川畜産試験場は2000年、十勝・新得の畜産試験場に統合されました。



F 林間市道

花・野菜技術センターの事務棟と研究棟の間を抜けて丸加高原に向かう市道は、自然観察に最適。ダート道沿いの林は季節ごとに表情を変えて訪問者の目を楽しませてくれます。キツネやシカがひょっこり顔を出すかもしれません。丸加高原伝習館まで約5kmの道のりです。

滝川のひつじとジンギスカン料理

滝川といえばジンギスカン料理。最初のレシピは1931年(昭和6年)、ここ東滝川にあった北海道滝川種羊場(現在の花・野菜技術センター)の山田喜平場長によって記されたとか。タレで味付けした羊肉を焼く滝川ふうのジンギスカンの原型は、この時完成したのです。おりしも国は開拓期の北海道で「綿羊100万頭計画」を推進中でした。ひつじは今も市民に愛され、丸加高原では、放牧のひつじたちがのんびり草をはんでいます。



丸加高原のひつじたち

フットパスは、 気まま旅。

足元は、履き慣れたスニーカーがいい。夏ならスポーツサンダルに膝丈のコットンパンツの組み合わせもあり、だ。お気に入りのTシャツの上に、思い切って派手なプリント柄のシャツを重ねよう。つばの大きなキャップは、少々の雨なら顔が濡れるのを防いでくれる。

ショルダーバッグ、あるいはデイパックの底には、防寒兼用のレインウェアを。ランチボックスと水筒のための余裕を残して、あとは趣味を詰め込めばいい。スケッチブックとコンテ、双眼鏡と野鳥図鑑、氷下魚とワンカップ……。おっと、

欲張りすぎるとフットワークに差し障りますぞ。

この小冊子が紹介したのは、へばったらケータイでいつでもタクシーを呼べるルートだから、冒険とはいえない。でも歩いて初めて見つかるものって、結構たくさんある。新発見の感動は、何も遠くに冒険に行かなくたって味わえるんです。

あちこち道草しながらノンビリ行こう。エコ・フットパスには決まりごととは、なんにもない。

たきかわ環境フォーラム代表
平田剛士



おしゃで機能的なウェアを選ぶのも
楽しみのひとつ。ナッツを一袋ポッケ
トに忍ばせて、歩きながらモグモグや
るとエネルギーが切れない。数字で達
成感を得たい人は、万歩計をどうぞ。

丸加高原「自然観察の森」ハンディ図鑑

たきかわ環境フォーラムの「自然調べ隊」が、丸加高原で見られる草花や野鳥たちの姿を、美しい写真とともに解説しました。エコ・フットパスを散歩するときのおともに、ぜひどうぞ！

定価500円

ご注文は ☎0125-24-2447



たきかわ環境フォーラム 新版 ECOフットパス・マップ たきかわを散歩する

初版発行 2007年4月20日
改訂新版発行 2011年3月31日
編集・発行 たきかわ環境フォーラム
<http://ecoup.la.coocan.jp/>
〒073-0034
北海道滝川市空知町2-6-31
滝川市森のかがく活動センター内
☎ 0125-24-2447 (越後弘事務局長)
印刷・製本 広小路印刷株式会社
〒073-0017 北海道滝川市一の坂町西3-1-31
☎ 0125-22-4325



イラストレーション ふかまちあき

© Takikawa Environment Forum 2007, 2011. All rights reserved.

本書の内容を無断で転記・記載することを禁じます。

本書は、2010年全労済地域貢献助成事業と、財団法人北海道新聞野生生物基金の助成(2010年度)によって作成されました。